

養父市養蚕農家の形状特性と分布傾向について

吉田高子* 浦添元気**

On the shape characteristic and the distribution tendency of the sericulture farmhouse in Yabu City

Takako.YOSHIDA* and Motoki.URAZOE**

The sericulture industry has been done for a long time in Yabu City. Therefore, do the in existence of a lot of peculiar three-story sericulture farmhouses. The number of sericulture farmhouse according to the form was examined based on the investigation done in 2006, and the distribution was researched. The feature was found respectively when examining it dividing Yabu City into four districts. It has been understood that buildings of the same type has concentrated on a part of district, and the same type has concentrated along the river.

Key words: Yabu City, sericulture industry, Sericulture farmhouse, Three story farmhouse

1. はじめに

兵庫県北部の但馬地方はその山岳地形と寒冷的な気候のため、農家の現金収入の獲得手段として古くから養蚕が盛んに行われてきた。特にその中でも現在の養父市域は繭生産量が多く、養蚕が盛んとなった江戸時代末期から、個々の農家での養蚕が急速に衰退した昭和中期にかけて、養蚕に適した形態の2階建てや3階建ての農家が多数建築された。それらは現在でも養父市内全域に多数分布しており、養父市独特の景観を形成している。

しかし、養蚕からの撤退や生活様式の変化、建物の老朽化などによる建て替えで、その数は確実に減少しつつあり、その現存状況と特徴について把握することが求め

平成20年6月19日受理

* 建築学科

** 総合理工学研究科環境系工学専攻

られている。本研究では上記のような現状を受けて平成18年度に行われた養父市における養蚕農家悉皆調査を基に、養父市内全域の養蚕農家建築の形態別の分布状況を知ることが目的とする。

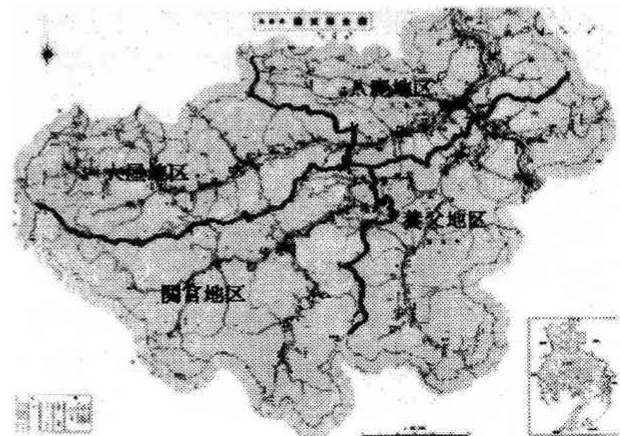


図 - 1 養父市全図

2. 調査の方法と分類

調査は平成18年8月1日～5日の5日間にわたって823戸の悉皆調査を行った。調査は外観調査と聞き取り調査の二つに大きく分かれており、外観調査は外観写真撮影と外観調査票作成の両方を行った。今回は調査結果の中でも特に外観写真を資料として利用した。

表-1 分類方法

A 茅葺屋根全て	D1 3階建 3階階高が2階より低い
B1 2階建 屋根裏に開口無し	D2 3階建 3階階高が2階より高いか同じ
B2 2階建 屋根裏の妻面に開口あり	E1 3階建屋根裏 3階建に屋根裏が存在する
C1 2階建 屋根裏に開口・壁あり	E2 4階 外観が4階建

分類は「正面(平側)から見える階層」「側面(妻側)から見える階層」「階高」の3つの要素を基に、外観から判る階層構造に着目して表-1のA～E2の8タイプに分類した。

Aタイプは茅葺屋根の家屋全てである。これは茅葺で現存しているものが極めて少数であるため階層構造に拠らず一つの分類とした。

B1タイプは平側と妻側が共に2階建ての家屋で、内部は2層構造となっているもの、同様にB2タイプは平側が2階建てだが、妻側に屋根裏空間を利用する為の開口部があり内部が3層構造になっているものである。

C1タイプはB2タイプ同様妻側に開口部を有するものだが、B2タイプとは異なり屋根裏に当たる第3層に壁が立ち上がり3階建てに近い形態となっているものである。

D1タイプは平側が3階建ての家屋のうち、3階の階高が2階の階高以下となっているものであり、D2タイ

プは3階の階高が2階の階高に比べて高いものである。

E1・E2タイプは何れも内部が4層構造のもので、E1タイプは平側が3階建てだが、妻側に屋根裏を第4層として利用していることを示す開口部を有するもの。対してE2タイプは平側から4階建てと判るものである。



図-2 タイプ別の実例写真

(E1・E2タイプは明確な写真がなかったため省略)

3. 各地区のタイプ別分布状況

養父市は平成16年に八鹿・養父・大屋・関宮の旧養父郡4町が合併して生まれた市であり、現在でも旧町域単位で独立性が強い。そのため、旧町域を一つの地区として4地区に分けて分析を行った。

前項の分類を適用した結果、養父市内の4地区と市内全域のタイプ別現存数は次のようになった。

3.1 八鹿地区

1) 概略

養父市内全域における悉皆調査で調査対象となった823戸のうち、八鹿地区に所在するものは202戸で、全体の24.8%を占めている。

表を見ると判るように、八鹿地区ではD1タイプが全体の40%を占めており、八鹿地区で三階建て養蚕農家と言えばD1タイプのことを指しているといえる。また、2階建てのB1・B2も合計で40%近くに達しており、他のタイプは何れも10%に満たない。現在の八鹿地区では外観が二階建てのものと3階階高の低い三階建てのもので大きく二分されていると判る。また、市内4地域では唯一3階建ての占める割合が50%以下となっている

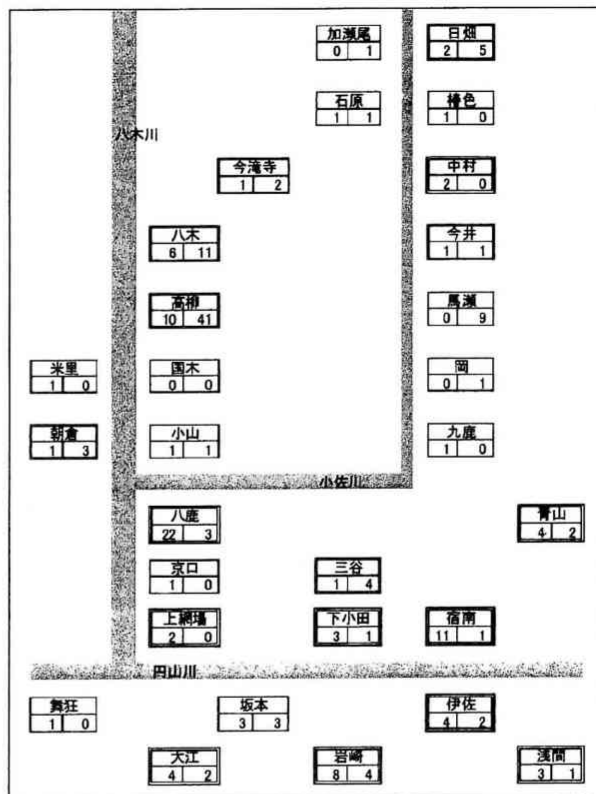


図-8 八鹿地区の階数別分布簡略図

2) 階数別にみた分布状況

八鹿地区は円山川に沿った山陰道沿いと、その対岸地域では2階建てが多く、八木川と小佐川の流域では共に3階建てが多いながらも2階建ても少なからぬ割合で分布していることがわかる。これは、八鹿の中心部や宿南といった古くから商業が盛んな場所では養蚕以外の家業を持っている住民が多く、養蚕以外に使い道が少なく使いづらい3階建てをあえて建築する必要がなかったためと考えられる。しかし、円山川対岸で市街化していない伊佐・岩崎・大江・浅間といった集落でも2階建てが3分の2を占めている点はそれでは説明できない。単純に地形から見ると、3階建て養蚕農家が八鹿地区で普及の際、円山川が障壁となり3階建ての伝播が遅れたためだと考えるのが自然である。

八鹿地区で最も特徴的な結果となっている高柳への3階建て養蚕農家の集中は、各種文献においても高柳の地名が養蚕の要所として頻りに登場することから見て、高柳が八鹿地区の養蚕業の中心であったためと考えら

表-2 八鹿地区タイプ別件数

地区名	A	B1	B2	C1	D1	D2	E1	E2	その他	合計
八鹿	0	0	2	0	0	1	0	0	0	3
下町	0	3	0	0	1	0	0	0	0	4
宮町	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
仲町	0	6	1	0	0	0	0	0	0	7
新町	0	8	0	0	0	0	0	0	0	8
元町	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
一部	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
小山	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
朝倉	0	0	0	1	3	0	0	0	0	4
京口	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
上綱場	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
舞狂	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
九鹿	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
八鹿	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
馬瀬	0	0	0	0	9	0	0	0	0	9
小佐	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
今井	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
中村	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
掃色	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
石原	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
日畑	0	0	0	2	3	2	0	0	0	7
加瀬尾	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
国木	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
米里	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
高柳	0	0	2	0	13	2	0	0	0	17
高柳上	0	0	0	0	3	1	0	0	0	4
高柳谷	0	0	1	0	7	0	0	0	0	8
万々谷	0	0	2	3	5	4	0	0	0	14
畑ヶ中	0	1	1	0	6	0	0	0	0	8
八木	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
向八木	0	1	1	0	1	1	0	0	0	4
中八木	0	1	0	0	1	1	0	0	0	3
上八木	0	0	3	0	2	2	0	0	0	7
今井	1	0	0	1	2	0	0	0	0	4
浅間	0	3	0	0	0	1	0	0	0	4
伊佐	2	4	0	0	2	0	0	0	0	8
坂本	0	1	1	1	3	0	0	0	0	6
岩崎	0	7	1	0	4	0	0	0	0	12
大江	0	0	1	2	3	0	0	0	0	6
下小田	0	1	1	1	1	0	0	0	0	4
宿南	0	2	0	0	1	0	0	0	0	3
宿南	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
宿南	1	4	1	0	0	0	0	0	0	6
宿南	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
宿南	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
三谷	0	0	0	0	2	2	0	0	0	4
三谷	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
青山	1	2	2	0	2	0	0	0	0	7
合計	7	56	21	17	81	19	0	0	1	202
	3.5%	27.7%	10.4%	8.4%	40.1%	9.4%	0.0%	0.0%	0.5%	100.0%

表-3 八鹿地区の階数別現存数

	2階建	3階建	合計
軒数	94	100	194
割合	48.5%	51.5%	100.0%

れる。現在の地図を確認しても高柳が養父市内の他の集落に比べて大規模であるのは明らかで、繭や蚕糸の流通拠点であった八鹿の市街地に近い高柳が3階建て養蚕農家という養蚕に最適化された建築を率先して取り入れたことは当然だと言える。

3) 3階建てのタイプ別にみた分布状況

既に上で述べた通り、八鹿地区ではD1タイプが主流であり、D2タイプが主流となっている集落は存在しない。特に円山川の東岸の集落ではD2は浅間の一軒を除き一切存在せず、非常に偏った分布となっている。

現在の3階建て養蚕農家の現存状況から考えると、八鹿地区ではD1が地区全域に普及した後にD2が養蚕規模の大きい高柳や八木といった集落に普及したものと考えられる。

3.2 養父地区

1) 概略

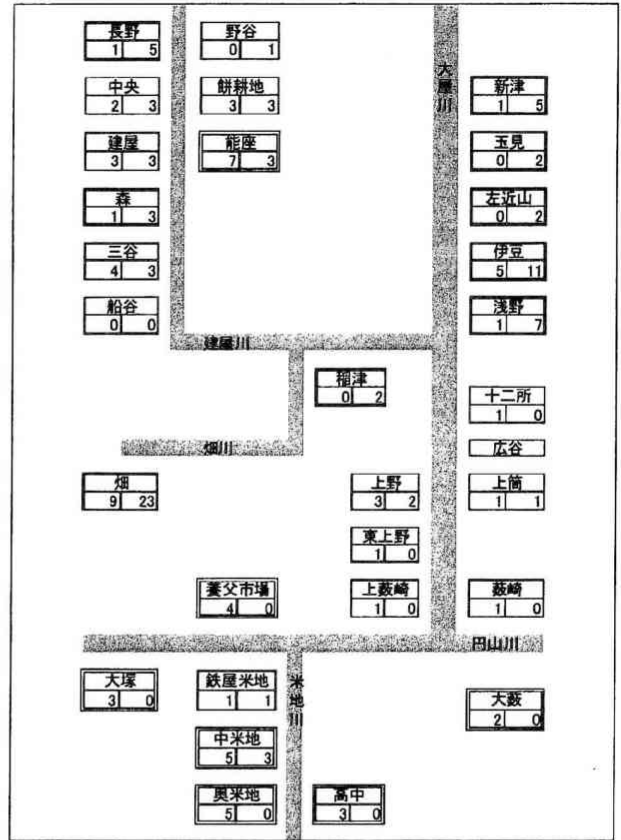
養父市内全域における悉皆調査で調査対象となった823戸のうち、養父地区に所在するものは153戸で、全体の18.6%を占めている。

表を見ると判るように、養父地区ではD1とD2の3階建て2種類だけで55%が占められており、八鹿地区とは明確に異なった傾向を示している。但し、養父地区と八鹿地区の最大の違いであるD2タイプの現存数46件のうち半数近い20件が畑集落に集中して存在しており、同集落のデータを除外した養父地区全体の傾向を見ると八鹿地区との間に大きな違いは見受けられない。

2) 階数別にみた分布状況

階数別にみると、養父地区は八鹿地区と非常に類似した分布を示している。円山川兩岸に2階建てが多く現存し、円山川の支流である大屋川や建屋川に沿った集落では3階建てが多く見られる。

養父地区で最も特徴的な傾向を示している畑への3階建ての集中は八鹿地区の高柳と比較すると非常に興味深い。川幅の広い八木川の河岸段丘の比較的広い地域に広がり、集落全体の戸数が多い高柳とは異なり、畑は



集落(地域)名	
2階建の戸数 (B1B2C1)	3階建の戸数 (D1D2)
太枠: 3階建てが多数の集落	
二重枠: 2階建てが多数の集落	

図-9 養父地区の集落別分布簡略図

表-4 養父地区タイプ別件数

地区名	A	B1	B2	C1	D1	D2	E1	E2	分類不能	合計
長野	0	1	0	0	5	0	0	0	0	6
中央	0	1	0	0	3	1	0	0	0	5
野谷	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
餅耕地	0	0	0	0	3	1	0	0	0	4
建屋	0	1	2	0	1	2	0	0	0	6
能座	0	1	4	2	2	1	0	0	0	10
森	0	0	1	0	1	2	0	0	0	4
三谷	0	0	4	0	3	0	0	0	0	7
船谷	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
畑	0	3	2	4	3	20	0	0	1	33
稲津	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
浅野	0	1	0	0	1	6	0	0	0	8
新津	0	0	1	0	4	1	0	0	0	6
玉見	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
左近山	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
伊豆	0	2	3	0	6	5	0	0	0	16
十二所	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
上箇	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
上野	0	2	1	0	1	1	0	0	0	5
東上野	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
上敷崎	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
養父市場	0	3	1	0	0	0	0	0	0	4
大藪	0	2	0	0	0	0	0	0	1	3
高柳	0	1	1	1	0	0	0	0	0	3
奥米地	0	4	1	0	0	0	0	0	0	5
中米地	0	2	2	1	3	0	0	0	0	8
鉄屋米地	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
大塚	0	2	1	0	0	0	0	0	0	3
合計	1	32	24	8	39	46	0	0	3	153
	0.7%	20.9%	15.7%	5.2%	25.5%	30.1%	0.0%	0.0%	2.0%	100.0%

表-5 養父地区の階数別現存数

	2階建	3階建	合計
軒数	64	85	149
割合	43.0%	57.0%	100.0%

大屋川の更に支流である畑川の上流に存在する谷間の集落に過ぎず、その戸数も圧倒的に少ない。この理由としては、畑での聞き取り調査の結果、現地の大工棟梁の存在が大きかったためだと判った。3階建て住居の建築技術を会得し、それを推奨する大工が集落に存在することは3階建て普及への大きな要因となったことは間違いなく、同集落への3階建ての集中に説明がつく。対して八鹿市街に近い高柳では建て替えにより2・3階建て養蚕農家の戸数が減少したため現存数が少なくなってしまうと考えられる。

3) 3階建てのタイプ別にみた分布状況

養父地区ではD2タイプがD1タイプより10%程多いが、畑がD2タイプの半数近く一集落でを占めているため、八鹿地区の様に他の集落すべてがどちらか一方のみに偏った分布にはなっていない。特に大屋川沿いの集落では玉見・左近山・浅野といった集落がD2中心の傾向を見せているに対し、伊豆や新津ではD1が少なからず存在している。但し、昭和6年の調査[1]では新津に14戸の三階建て養蚕農家の存在が認められており、養蚕最盛期における3階建て養蚕農家の分布と現在の分布が相似しているかどうかは判断できない。

建屋川沿いの集落では3階建て養蚕農家の全体数が少ないが、その殆どがD1である。また、円山川東岸の集落では数少ない3階建ての全てがD1となっている。この二つの地域はいずれも2階建てが養父市内の他の集落に比べて多いため、2階建てとD1の数に何らかの関連性があるのではと考えられる。

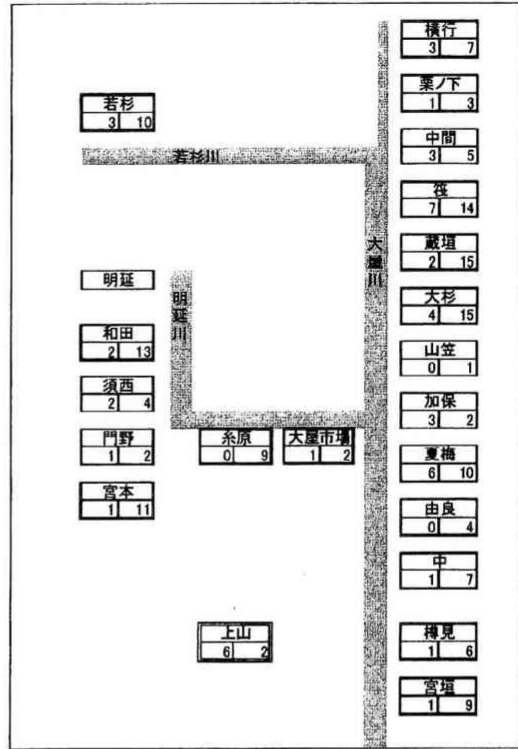
3.3 大屋地区

1) 概略

養父市内全域における悉皆調査で調査対象となった823戸のうち、大屋地区に所在するものは201戸で、全体の24.4%を占めている。

大屋地区は養父市4地区の中で最も特徴的な分布が見られる。この地区では3階建て養蚕農家であるD1とD2の合計が全体の75%近くに達し、調査対象の4軒に3軒は3階建て養蚕農家という結果となった。特に3階建てのD2が非常に多く、養父市内に現存するうちのほぼ半数が大屋地区に存在している。これは大屋

地区は但馬の近代養蚕の発祥の地と呼ばれた程養蚕が盛んな地区であったことから、D2タイプが養蚕の規模拡大に適した構造として、大屋地区を中心に普及したためと考えられる。



集落(地域)名	
2階建の戸数 (B1B2C1)	3階建の戸数 (D1D2)
太枠:3階建てが多数の集落	
二重枠:2階建てが多数の集落	

図-10 大屋地区の集落別分布簡略図

表-6 大屋地区タイプ別件数

地区名	A	B1	B2	C1	D1	D2	E1	E2	その他	合計
宮垣	0	0	1	0	1	7	0	1	0	10
上山	1	1	1	4	1	1	0	0	0	9
樽見	0	0	0	1	2	4	0	0	1	8
中	0	0	1	0	2	5	0	0	0	8
由良	0	0	0	0	0	4	0	0	0	4
夏梅	0	1	0	5	8	2	0	0	0	16
加保	0	0	0	3	1	1	0	0	0	5
大屋市場	0	1	0	0	0	1	1	0	0	3
山笠	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
大杉	0	0	2	2	1	14	0	0	0	19
系原	0	0	0	0	1	8	0	0	0	9
宮本	0	0	0	1	2	9	0	0	0	12
門野	0	0	0	1	0	2	0	0	0	3
須西	0	0	0	2	1	3	0	0	0	6
和田	0	0	0	2	6	7	0	0	0	15
蔵垣	0	0	0	2	6	9	0	0	0	17
笹	0	3	0	4	3	11	0	0	0	21
中間	0	0	0	3	0	5	0	0	0	8
栗ノ下	0	0	0	1	0	3	0	0	0	4
若杉	0	1	0	2	4	6	0	0	0	13
横行	0	2	0	1	1	6	0	0	0	10
合計	1	9	5	34	41	108	1	1	1	201
	0.5%	4.5%	2.5%	16.9%	20.4%	53.7%	0.5%	0.5%	0.5%	100.0%

表-7 大屋地区の階数別現存数

	2	3	合計
軒数	48	151	199
割合	24.1%	75.9%	100.0%

2) 階数別にみた分布状況

大屋地区では3階建ての割合が高い集落がほとんどで、2階建てが1ないし0の集落も少なからず存在する。その中で唯一2階建てが3階建てを大きく上回っているのが上山である。この集落は大屋川から外れた山間部に位置し、川沿いに連続する他の集落とは異なった立地にある。上山が大屋地区で唯一2階建てが大きな割合を占める集落になったのかについてはいくつかの可能性が考えられるが、上山の地理的状況から考えると金銭や労力の確保が困難で3階建てへの改造や新築が進まなかったか、3階建てを必要とする規模の家が少なかったための何れかではないかと考えられる。

3階建ての多い大屋地区の中でも特に大杉・蔵垣・筏といった大屋川上流域に3階建ての集中が見られる。これは蔵垣が近代但馬の養蚕の始まりの土地であると言われることから考えると、古くから絶えることなく養蚕を続けていた大屋地区における養蚕の規模の大きさと重要性の現れと言える。

3) 3階建てのタイプ別にみた分布状況

大屋地区では夏梅を除いた殆どの集落でD2がD1より多い。また、この図を2階建てと3階建ての戸数の分布図と比較すると、3階建てが2階建てに対して多数を占める集落ではD1に対してD2が多数を占めている傾向があると判る。特に大屋地区で最も3階建ての多い大杉や筏といった集落でこの傾向は顕著である。しかし、大杉と筏の両集落に挟まれ、多くの3階建てが残る蔵垣ではD1は他の地区ほど少ないため、2階建ての戸数と3階建ての形態別の戸数に明確な相関関係があるとは言いきれない。

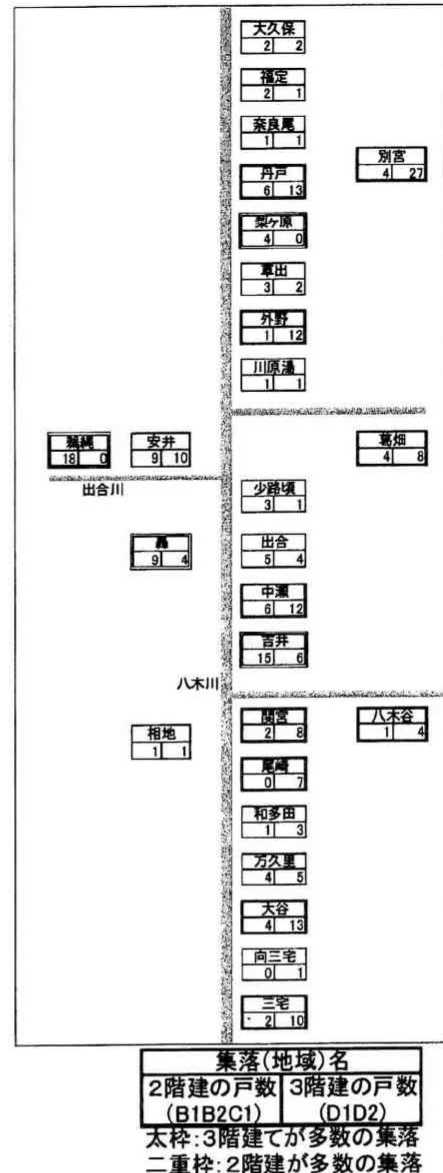


図-11 関宮地区の集落別分布簡略図

3.4 関宮地区

1) 概略

養父市内全域における悉皆調査で調査対象となった823戸のうち、関宮地区に所在するものは267戸で、全体の32.4%を占めている。

関宮地区は3階建てのD1・D2が58%近くを占めているが、八鹿や養父に比べて若干多い程度で大きな差となっていない。しかし、C1タイプの数が他の地区

表-8 関宮地区タイプ別件数

地区名	A	B1	B2	C1	D1	D2	E1	E2	その他	合計
三宅	0	1	0	1	9	1	0	0	0	12
向三宅	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
大谷	0	4	0	0	5	8	0	0	0	17
方久里	0	0	0	4	4	1	0	0	0	9
和多田	0	0	0	1	3	0	0	0	0	4
尾崎	0	0	0	0	6	1	0	0	0	7
関宮	0	1	0	1	7	1	0	0	0	10
相地	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
八木谷	0	0	0	1	0	4	0	0	0	5
吉井	0	6	2	7	6	0	0	0	1	22
中瀬	0	1	4	1	8	3	1	0	0	18
藪	0	3	3	3	3	1	0	0	0	13
出合	0	2	0	3	3	1	0	0	0	9
安井	0	1	1	7	3	6	1	0	0	19
藪織	0	0	4	14	0	0	0	0	0	18
小路頃	0	0	0	3	1	0	0	0	0	4
川原湯	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
葛畑	0	0	2	2	5	3	0	0	0	12
別宮	0	1	1	2	17	10	0	0	1	32
外野	0	0	0	1	6	6	0	0	0	13
草出	0	0	0	3	0	2	0	0	0	5
梨ヶ原	0	0	2	2	0	0	0	0	0	4
丹戸	0	0	4	2	8	5	0	0	0	19
奈良尾	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
福定	0	0	0	2	0	1	0	0	1	4
大久保	0	0	1	1	1	1	0	0	0	4
合計	0	21	24	63	98	56	2	0	3	267
	0.0%	7.9%	9.0%	23.6%	36.7%	21.0%	0.7%	0.0%	1.1%	100.0%

表-9 関宮地区の階数別現存数

階数	2	3	合計
軒数	108	156	264
割合	40.9%	59.1%	100.0%

に比べ非常に多く、特徴となっている。C1タイプは構造的には2階建てと3階建ての中間に位置しているため、関宮地区でのC1タイプの普及が他の3階建て各タイプの形成に何らかの影響を与えた可能性がある。

2) 階数別にみた分布状況

関宮地区では3階建てが多くを占める集落の数の方が多い。しかし、現存数の差では3階建ては2階建ての1.5倍に過ぎないため、この結果は特定の集落に2階建てが集中しているからだと思われる。関宮地区で特に2階建ての数が多いのは鶴縄・安井・轟・吉井の四集落だが、4集落は明確に二つのタイプに分けられる。

一つ目が鶴縄・安井・轟の3集落で、これらの集落はいずれも八木川の本流から外れた山間部に位置している。これと同様な傾向は大屋地区の上山にも見られ、重要な交通路でもあった大屋・八木の両河川から外れた集落に二階建てを中心とする理由、もしくは3階建てに新築・改築できない共通した理由があったのではと考えられる。

二つ目のタイプは吉井の1集落のみであるが、吉井が2階建て中心の分布となったのは関宮の中心部に近かったためと考えられる。養父市内4地区では何れも古くから商業的な中心であった集落とその周辺で2階建てが多い傾向が見られるため、吉井もこの一例だろう。ただし、他の地区とは異なり、関宮では中心である関宮の集落自体で3階建ての現存数の方が多い。これが関宮での元々の傾向なのか、偶然2階建ての建て替えが多く行われたためなのかは定かではないが、前者だと仮定した場合、吉井への2階建て集中は他の集落とは異なる特別な理由によるものと思われる。

次に関宮地区での3階建てについてだが、3階建てが多い集落の中でも別宮の3階建ての数が特に多い。別宮は香美町との市境に近く、集落全体の標高が600mを超える養父市の中でも特に高所に位置する集落であり、周囲のスキー場への拠点として現在多数の旅館が営業している。この集落は先に挙げた二階建ての多い鶴縄等の集落とは異なり、養父市内で最も奥部に位置しているにも関わらず3階建てが多い。なぜこのように明らかな

違いがでるのかは、聞き取り調査での住人の方の話で判った。その住人の方によると、別宮で3階建てが多い理由は冬対策で、3階建てだと積雪時に燃料や食料を大量に屋内に保管しておけるため普及したとのことだった。もちろん別宮でも養蚕は行われていたため、養蚕空間の確保という一般的な3階建て採用の理由も含まれていたと思われるが、別宮が養父市内の他の集落と違う点を考えた場合この理由は納得できるものと言える。

3) 3階建てのタイプ別にみた分布状況

関宮地区では関宮とその周辺の約半数の集落でD1が多数を占めているが、残りの半数の集落ではどちらか一方に偏った傾向は見られない。

D1が多数を占める中瀬から三宅までの八木川沿いの一連の集落では、現存する3階建て養蚕農家のほぼ全てがD1タイプであり、八木川下流の養父地区との関連性が見て取れる。ただし、その中でも大谷だけが近接する他の集落に比べて非常に多いD2タイプを残している。大谷は周囲の万久里や三宅といった集落と地形や集落の規模で類似しているため、集落が置かれた環境によるものとは考えづらい。周囲と同様の環境であれば、あえて他のタイプを導入する理由は人的な要因であると考えるのが自然であり、住居に対して大きな影響を与える出来事としては特定の木工による影響や、大火による大々的な新築の可能性はある。

山奥部の葛畑・別宮・外野・丹戸といった集落で3階建てが多く存在するものの、D1とD2のどちらかに偏った分布を見せない理由としては、次のような可能性が考えられる。既に出たとおりこの地域では養蚕空間の確保だけでなく冬季の物資保管空間確保という明確な目的があることや、八木川の源流域という最奥部に存在するため他の地区に比べて3階建ての普及が遅かったことから、これらの集落が3階建てを選択する際はD1とD2の何れも既に普及しており、どちらの形態を建築するかを選択できたため施主に応じて二つの形態が共に普及したのではと推測される。

4. まとめ

養父市内全域で調査対象となった家屋は823戸。養父市の全世帯数が9,299世帯(平成12年国勢調査)であることから考えると、全戸数の一割前後が養蚕農家かそれに類似した形式の建物である。また、その内3階

建て養蚕農家は60%を占めている。

各タイプ別に見ると、B1は養父地区、C1は関宮地区、D1は八鹿・関宮地区、D2は大屋地区がそれぞれ圧倒的に多い。また、大屋地区のB1・B2や養父地区のC1、八鹿地区のD2はいずれも他の地区に比べて非常に少ない。この事は、各タイプの形成と拡大にそれぞれの地区の特性が影響したためと考えられる。

次に、各地区のタイプ別の分布を基に、養父市特有の3階建て養蚕農家の分布を見ると次のようなことが判る。

D1タイプは八木川流域の関宮・八鹿地区だけでなく養父地区の建屋川沿いの集落や円山川の東岸の集落でも多くを占めており、D2タイプに比べて広い範囲で主流となっている。

これに対して、D2タイプは大屋川・明延川・畑川の流域に大部分が存在しており、極端な戸数の集中から大屋地区と畑がこの形態の発明と発展に何らかの影響を与えている。

また、養父市内ではD1、D2のどちらか一方のタイプしか存在しないという集落が円山川の東岸を除いて存在しない。地区単位のタイプ別戸数で大きな差が付いていても、もう一方のタイプがある程度数を占める集落が必ずといって良いほど存在している。両者が混在する場所の例としては関宮地区の山奥部があるが、これらの集落は他の集落とは異なり養蚕目的ではなく、冬季の燃料や食料の保管目的で3階建てを採用したことが聞き取りにより判明したため、二種類の3階建てが普及してから必要に応じて形態を選択したのでであろうと推測される。

これまでの各地区の分布から判ったことをから、養父市全域の養蚕農家の分布について以下のことが言える。

1) 円山川両岸への2階建ての集中

八鹿地区・養父地区それぞれの分布から、円山川両岸の集落では2階建てがその中心となっていると判る。このことから、八鹿や宿南といった山陰道沿いの古くからの市街地では養蚕農家型の住居を町家の延長線上としても用いていたため、養蚕規模の拡大を目的とした3階建てへの移行は行わなかったためと考えられる。また、円山川東岸の岩崎・大江・奥米地といった集落で2階建てが多くみられるのは、川を挟んで交流のあった八鹿や

宿南に影響されて2階建てが多く用いられたためであると同時に、3階建てへの改造や新築の普及が円山川に阻まれたためと推測される。

2) 八木川・大屋川流域への3階建ての集中

円山川の支流である八木川と大屋川のどちらの流域でも3階建てが養蚕農家の主流となっている。集落ごとに見られる戸数の差は養蚕の規模と集落の規模にそれぞれ比例しており、現在多くの養蚕農家を有する集落（八木集落等）ほど養蚕に関する資料にその名が多く残されている。また、C1タイプの分布が3階建ての分布範囲に収まることから、どちらか一方がもう一方の形成に影響した可能性が高い。

3) 交通路から離れた集落での2階建ての割合の高さ

大屋地区の上川、関宮地区の鶴縄や轟、養父地区の建屋谷地域など、八木川や大屋川の本流やそれに沿った街道筋から外れた山間部の集落では他に比べて2階建ての割合が高い。これは養蚕最盛期の集落間の人の移動や流通、それぞれの集落の規模や資本が主要な交通路沿いに比べて小さかったため3階建てへの積極的な移行が行えなかったためだと考えられる。

4) E1・E2タイプの特殊性

4層構造となっているE1・E2両タイプは、どちらもごく少数が存在するのみで、一つの固定された形式とは言い難く分布にも傾向は見られない。裕福な養蚕農家が床面積の拡大を狙って個々に試してみたものの、普及前に多層型の養蚕農家建築そのものが衰退したことによりごく少数で終わったものと推測される。

参考文献

- 1) 河野正直 地学雑誌第562号 「但馬に於ける居住景観の地理的考察」 地学雑誌(1935)
- 2) 西村鉄治 但馬の養蚕と生糸(但馬養蚕業史) 北星社(1985)